

新進研究者 Research Note

接続問題の新たな解決策に向けて

A new Solution to the Interface Problem

丸山望実

Abstract

The purpose of this paper is to reinterpret the interface problem from the McDowell-Dreyfus debate, and to present a new solution for this problem. The definition of interface problem is how a rational relationship between propositional intentions and non-propositional motor representations can be constructed. The McDowell-Dreyfus debate, on the other hand, was a debate about the status of our ‘conceptual capacity’. ‘Conceptual’ here has almost the same meaning as ‘propositional’, and their positions can be interpreted as two solutions for the interface problem. After examining these solutions, I attempt to consider my own new response to the interface problem.

(1) 研究テーマ

本稿は「接続問題 (interface problem)」を扱う。接続問題はエリザベス・パシェリーによる意図の区別に基づく⁽¹⁾。彼女によると未来指向的意図 (Future-directed intention ;F 意図)・現在指向的意図 (Present-directed intention ;P 意図)・運動意図 (Motor intention ;M 意図) という三種類の意図が存在する。これらは表象の形式が異なる。F 意図と P 意図は命題的な形式を持つのに対して、M 意図は「モーター形式(motor format)」と呼ばれる非命題的な形式を持つ。M 意図が示すものは「運動表象」と呼ばれ、行為の達成に必要な生物力学、運動学上の様々なアスペクトの表象を可能にする。この運動表象により特定の状況に応じた細かな行為の調整が可能となる。

これらの意図を前提として、ステファン・バターフィルらは問題点を指摘する⁽²⁾。それはある歯車を止めるために、レバーを引く人を例として示される。私たちがレバーを引くことに決めたとき、「レバーを引こう」といった命題的な F 意図・P 意図は私たちの腕を伸ばし、つかみ、レバーを引くという行為を導く。しかし同時にこれらの行為は、M 意図による細かな調整を通じて導かれる。私たちの安定した行為のためには、このような様々な意図が協働しつつ行為を導き、特定の結果をもたらすことに非偶然的に一致していな

ければならない。しかし F 意図・P 意図と M 意図は形式が異なっていた。したがって、この協働がどのようにしてなされるのかは明らかでない。この意図、表象間の接続を疑問視するのが「接続問題」と呼ばれる問題である。

接続問題については近年積極的に議論されているが、その解決には至っていない。本稿では先行研究を踏まえて問題を解消すること、すなわち接続問題がそもそも問題とならないようにする方法を検討したい。本稿では以下の二つの方法について検討する。

(I) 運動表象 (M 意図) は実際には命題的な内容を持っており両者の接続の仕方は問題とならず、したがって接続問題は問題とならない

(II) 運動表象 (M 意図) は命題的な内容を持っていないが、そのようなものは「意図」と呼ばれるべきでなく、したがって接続問題は問題とならない

これらの解消策は、ジョン・マクダウェルとヒューバート・ドレイファスの論争に基づく。彼らは私たちの概念能力をめぐる議論したことで知られている。両者が争った「概念」的は「命題」的と読み替えることが可能だろう。このように読み替えると、論争と接続問題には多くの共通点があると思われるが、その指摘は十分でない。本稿は論争に基づく二つの解消策の検討を通じ、論争と接続問題の関係を明確化し、接続問題への新たな応答を考察する。

(2) 研究の背景・先行研究

マクダウェルに基づく解消策 (I) は、類似したものがすでに接続問題の議論で主張されている。それはバターフィルとコラド・シニガリアによる。彼らは命題的な意図に含まれる「直示的概念」に注目し、接続問題の解消を試みた。彼らは接続問題を、命題的な表象である意図と非命題的な表象である運動表象が合理的関係を持つためにはどちらかの翻訳が必要になるが、その翻訳の仕方が不明であるために生じる問題だと特徴づける。そのうえで、翻訳の必要ない両者の関係性を考えることで接続問題の回避を試みている⁽³⁾。

例えば、私たちが道のりを示されるとき、その方法は二種類ある。一つは「信号を右に曲がれ」や「橋を渡れ」といった命題的な指示がある。もう一つは、地図上に現れるもの (cartographic) による非命題的な指示がある。ここで「この道を行け (Follow this route)」という命題的な指示を与えられたとする。この指示に含まれる直示的概念「この道」は、非命題的な地図上に現れうるものに言及する。したがって、この指示には、命題的なものと非命題的なものがともに含まれ、もはやそれらの翻訳は必要ない。故に、接続

問題で問題となっていた翻訳も問題とならないと考えられている。

行為に関する意図や信念にも直示的概念が含まれると彼らは考える。例えば「あれをする (Do that)」といったものだ。これは言語による命題的な内容だけでは十分でなく、「ああやる (that)」の中身が非言語的な仕方で特定されて初めて行為に関与できる。彼らはこのような指示が私たちの行為の細部に含まれると考えることで、接続問題が解消可能だと提案する。

このバターフィルらによる主張を批判するのがパシェリーとミルト・マイロポウロスである。彼女らの指摘する問題をここでは三点取り上げる(4)。

一つ目の問題は「意識的なアクセス可能性の問題」がある。バターフィルらが主張する「直示的概念」は通常、発話の場面に用いられる。例えば「あれ」という発話で机の上のリンゴに言及する際には、知覚による注意が重要となる。すなわち、この知覚により直示的概念の指示対象が確定される。しかし、パシェリーらは行為と関連する運動表象に意識的にアクセスすることは不可能だと主張する。そしてこのことはバターフィルらの主張が「直示的」でないことを意味しており、したがって彼らの主張は間違っているとされる。

二つ目の問題は「可謬性の問題」である。パシェリーらはバターフィルらによる説明が行為の失敗を説明できないと指摘する。ここで指摘される失敗とは「直示」が誤った対象を指示してしまうことである。発話行為においては、例えば、私たちは青りんごに言及しようとして意図しながら、めまいに襲われてしまい「あのリンゴ」という指差しで赤いリンゴを、誤って指してしまうことがある。この時指差しによる直示は、意図した対象である青りんごと異なる対象（赤いリンゴ）を指しているために、指示に失敗している。一方で M 意図は特定の運動表象を直示するが、そこには実際の指差しや知覚といった指示は存在していない。このことは M 意図が直示を失敗しないということを意味する。しかし実際には、ある特定の行為を意図しながらもそれとは異なる行為をしてしまうことは十分にあり得るだろう。したがって、この可能性を無視するバターフィルらの主張は誤っているとされる。

三つ目の問題は「選択の問題」である。バターフィルらは「直示」に注目することで、非命題的な内容から命題的な内容への「翻訳」を避け、接続問題の解消を試みた。しかし二つ目の問題でも指摘したように、一般的に「直示」には知覚といった、対象を選択し特定する手段を必要とする。「あのリンゴ」という指示には知覚や指差しが利用可能だった。では、「あれをする」という意図の直示の対象の特定はどのようにするのか。それは、運動表象を通じてしか達成できないだろう。しかしこれは結局、意図と運動表象の間に「翻訳」のプロセスを再挿入し、再び接続問題に陥ることになると批判される。

現在、接続問題に対しては様々な応答があるが、どれも決定的でない⁽⁵⁾。本稿ではその原因が、接続問題への応答の方向性が間違っているためだと考える。これらの応答は、運動表象と呼ばれる非命題的な M 意図の存在を認めたいうで、その他の命題的な形式をした意図との関係性を合理的なものにすることを試みている。一方で本稿では、M 意図の存在を否定することでの接続問題への応答を目指す。(1)でも述べたようにこれはマクダウェルとドレイファスの論争の再検討を通じてなされる。以下でこの論争の要点を示す。

まず、マクダウェルは『心と世界』で次のように主張する⁽⁶⁾。彼は所与の神話批判⁽⁷⁾を重く受け止め、概念的な内容を持たない感覚所与と信念の間の正当化関係の存在を否定する。同時に彼は、知覚経験と信念の間の正当化を放棄する斉合説⁽⁸⁾も批判する。そこで彼は、私たちの知覚がすでに概念的(=命題的)だと主張する。さらにマクダウェルは行為も概念能力の行使だと主張する。というのも、私たちは行為中に「なぜ？」と尋ねられればその理由を答えられるためである。したがって、私たちは行為の最中にその理由に意識的にアクセス可能であるため、行為も概念的だとマクダウェルは考える⁽⁹⁾。

一方でドレイファスは「没入的対処」に基づき、私たちの行為には、非概念的なプロセスによってのみ達成可能なものがあると反論する⁽¹⁰⁾。彼は行為の一部は概念的だと認める。例えば、サッカーの初心者は努めて「ボールをよく見て」「ボールを蹴る」必要がある。この時行為者は、ふるまいに先立ち意図を形成し行為を達成する。したがって、この行為は概念的だとドレイファスも認める。しかし彼によると、行為者が練習を積み、「エキスパート」の段階に達したとき行為は次のようになる。すなわち、事前の意図が必要なく、その状況に、サッカーの例であればボール等に応答するように人は行為する。この時、意図は形成されない。ただし、この一連の「没入的対処」の中断を伴えば、意図は存在するとドレイファスは認める。しかしこのときも、理由である命題的な信念は、例えば「なぜ？」と問われることで、はじめて形成されるとドレイファスは主張する。したがって没入的対処は非概念的である。

マクダウェルもエキスパートの先行する意図のない行為が存在することを認める。しかし彼はそのような行為も概念的であると主張し、あくまでもドレイファスと対立する。マクダウェルによるとエキスパートは「これを蹴る」といった直示的概念を含む概念を現実化(realize)しているのである。したがって、私たちの行為はすべて概念的であると依然として彼は主張する。

(3) 筆者の主張

マクダウェルとドレイファスのそれぞれに基づく解消策を考察する。マク

ダウエルは(2)で確認したように、行為がすべて概念能力の行使だと主張する。このマクダウエルの主張する概念主義と接続問題との関係は、その主張の難解さも相まって一つに定めることは困難である。本稿ではその可能性の一つとして解消策（I）を提示したい。それは次のようなものである。

（I）運動表象（M 意図）は実際には命題的な内容を持っており両者の接続の仕方は問題とならず、したがって接続問題は問題とならない

ドレイファスは他の接続問題の議論と同様、命題的な意図によらない行為の存在を認める。接続問題はこれを運動表象で説明することで生じた。彼はこの点には他の論者らに同意しないだろう。彼は技能の行使といった行為を没入的対処と呼び、意図の介在を否定するためである。彼によると対処を意図が引き起こす必要はない。行為の理由を説明するため等、必要に応じて事後的に意図を形成すれば十分だと彼は考える。これを解消策（II）と呼ぶ。

（II）運動表象（M 意図）は命題的な内容を持っていないが、そのようなものは「意図」と呼ばれるべきでなく、したがって接続問題は問題とならない

解消策（I）はバターフィルらの主張と類似する。もちろんマクダウエルが運動表象と呼ばれるものも命題的だと主張し、バターフィルらは非命題的だとする点は異なる。しかし両者は「直示的概念」を経由し、命題的な意図と非命題的な運動表象との間の「翻訳」を回避することを目指しているという点で、同じ方向性を持つ議論だと考えられる。以下では、前節でみたパシェリーらの批判に対して解消策（I）がどのように応答できるのか検討する。

「意識的なアクセス可能性の問題」と「選択の問題」は、運動表象の非命題的な内容に代わって行為のうちに存在する「直示的概念」の指示対象を、意識的なアクセスまたは翻訳に訴えないで特定することが困難だという問題である。これに解消策（I）はどのように答えることができるのか。マクダウエルによるとこの直示的概念があらわれる場面は二つある。

一つは知覚の場面である。マクダウエルは知覚経験の内容は命題的だと主張する。これには経験内容は言語で記述し尽くせないほど豊かで、命題的でありえないという反論がある⁽¹¹⁾。マクダウエルは、私たちが経験内容の全てを記述する語彙を持たないことを認める。しかし一方で、経験内容を「あの色合い（that shade）」といった語で言語化できれば、それは概念的と呼ぶに十分だと再反論する。ここで働いているのは、経験とともに始まる「再認能

力」だとされる。この再認能力は(2)で確認した「意識的なアクセス可能性の問題」に再度直面するだろう。というのもこの能力の行使には、対象への意識的なアクセスを必要とするためだ。したがってこの考えは採用できない。

もう一つは、没入的対処の場面である。ドレイファスはこの行為を非概念的だと考えるが、マクダウェルは概念的だと主張する。ここでも重要なのは直示的概念である。サッカー選手の例では、シュートをすることによって「あれをする (Do that)」という概念が現実化するのである。この概念に現れる直示的な「あれ (that)」の指示対象はそこでの振る舞いである。この行為はすべてが意識的にコントロールされるものでないと、マクダウェルもドレイファスと同様認めている。したがって、この直示的概念の指示対象は意識的なアクセスは必要ない。このことは二つの問題点であった指示対象の特定に関する問題に陥らない、運動表象の解釈を可能とする。したがって、解消策 (I) はパシェリーらによる批判を退けることができる。

では、「可謬性の問題」はどうか。この批判は解消策 (I) にも問題となるだろう。というのも、先ほど確認したように、マクダウェルに基づく直示的概念の対象はそこでの振る舞いにより特定される。したがってその指示対象はまさにその振る舞いによって特定されるために、やはりその指示を誤ることはあり得ないだろう。これはパシェリーらによる批判が、マクダウェルに基づく解消策 (I) にも当てはまることを意味する。

では、ドレイファスに基づく解消策 (II) はどれ程もっともらしいのか。解消策 (I) にとって問題となる諸批判は問題とならない。というのもこの解消策は M 意図の存在自体を否定するが、パシェリーらの批判は運動表象に含まれる直示的概念に関するものばかりであったためである。

問題の発端である、パシェリーによる新たな「意図」の存在の主張は、技能の行使といった意識的なコントロールのない、きめ細かな行為を正当に扱うためである。解消策 (II) はこのような行為をどう説明するのか。

解消策 (II) はドレイファスの議論に基づく。彼は技能の行使のような行為を没入的対処と呼び、それらは意識的にコントロールされないと考えた。彼はこの没入的対処にとって意図は「引き金 (trigger)」であると主張する。しかしこの意図は、引き金となった以降は働きを示さない。サッカー選手は「シュートを打とう」という意図が引き金となり、それ以降の目線や手足のふるまいが導かれていく。このように主張することでドレイファスはパシェリーらと異なった仕方で、意識的にコントロールされない行為を説明する。

また、技能の行使といった行為のもつもう一つの特徴は、行為者が行為の際に抱く「感覚」である⁽¹²⁾。例えば、自転車を運転している際に車体が不自

然に傾いてしまっている場合がある。この時私たちは「満足のいくゲシュタルト」から逸脱しているように感じる。そして私たちは、この逸脱の感覚を減らすように無意識のうちに行為を調整するのである。

パシェリーは技能の行使といったきめ細かな、意識的なコントロールの及ばない行為を説明するために M 意図を導入した。しかし没入的対処という別の手段でこの行為を説明することができれば、もはや M 意図の存在を想定する必要はなくなる。このことは「接続問題」の解消を意味するだろう。

(4) 今後の展望

以上の議論を通じて、接続問題に対する、マクダウェルとドレイファスのそれぞれに基づく二つの解消策を考案した。その結果、両者の哲学の枠組みと接続問題の関係性ととも、両解消策の今後検討すべき課題が見えてきた。

マクダウェルに基づく解消策（Ⅰ）は、パシェリーらへの再反論を通じた「直示的概念」のさらなる検討が必要だろう。また、ドレイファスに基づく解消策（Ⅱ）によると、M 意図すなわち運動表象のもつ役割を「感覚」で説明するが、この説明が十分であるかはさらに検討されるべきだろう。というのもこの点に関する詳細は、彼自身が十分に明らかにしていないためだ。そしてこの点が明らかにされなければ、接続問題が十分に解消されたはいえないだろう。これらの点は接続問題の解消だけではなく、マクダウェルとドレイファスの哲学をより進展させていく点でも重要な試みであろう。

注

(1)Pacherie[2006]

(2)Butterfill and Sinigaglia[2014]

(3)Ibid,pp.131-138

(4)Mylopoulos and Pacherie[2017],pp.13-17 なお本来は問題点が 4 点指摘されているが、本稿ではそのうちの 3 つを扱う。というのも 1 つ目の批判はバターフィルらの議論の方法に関するもので、本稿で検討する解消策に対する批判にはならないためだ。

(5)例えば Burnston[2017]や Ferretti and Caiani[2019]がある。

(6)マクダウェル[2012]

(7)セラーズ[2006]

(8)デイヴィドソン[1983]

(9)McDowell[2009]で彼は知覚経験の内容を非命題的なものとして立場を弱めているが、本稿では彼を論争の時期に限って扱う。すなわち「概念的」

であることは「命題的」であると等しいものとして扱う。

(10)ドレイファスのマクダウエルに対する反論には「すべての行為達成の内には非概念的な要素が含まれている」という点と「行為の中には非概念的なプロセスによってのみ達成可能なものがある」という点があるように思われるが、本稿では字数の制限もありもっぱら後者の点について扱う。

(11)マクダウエル[2012],101–106 頁

(12)Dreyfus[2001],p.150

(5) 参考文献

Burnston, D.C.[2017]”Interface problems in the Explanation of Action”
Philosophical Explarations 20 (2), pp.242–258

Butterfill, Stephan A and Singaglia, Corrado[2014],”Intention and Motor Representation in Purposive Action,” Philosophy and Phenomenological Research LXXXVIII,pp.119–145

デイヴィドソン,ドナルド,1983年「真理と知識の斉合説」(『主観的、間主観的、客観的』清塚邦彦,柏端達也,篠原成彦訳,春秋社,2013年 218–251 頁)

Dreyfus, Hubert L.[2001]”The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis” in Mark A. Wrathall(eds.), Skillful Coping Essays on the Phenomenology of everyday perception and action(Oxford University Press, 2014),pp.147–156

Ferretti, G. and Caiani, S. Z.[2019],”Solving the interface problem without translation; The same format thesis,” Pacific Philosophical Quarterly 100, pp.301–333

McDowell, John[2007],”Response to Dreyfus,” in Engaged Intellect Philosophical Essays[2013]pp.324–328

McDowell, John[2009],”Avoiding the Myth of the Given,” Having the Word in View; Essays on Kant, Hegel and Sellars, Harvard University Press 2009

マクダウエル,ジョン,2012年『心と世界』神崎繁,河田健太郎,荒畑靖宏,村井忠康訳,勁草書房

Mylopoulos, M. and Pacherie, E.[2017],”Intentions and motor representations; the interface challenge,” Review of philosophy and Psychology 8, pp.317–336

Pacherie, Elisabeth[2006],”Toward a dynamic theory of intentions,” in Pockett, S., Banks W. P.,and Gallagher S., Does Consciousness Cause

Behavior? An Investigation of the Nature of Volition, MIT Press,
pp.145-167

セラーズ,ウィルフリド,2006年『経験論と心の哲学』浜野研三訳,岩波書店
(九州大学)